織田信雄（のぶかつ）　篇３

信雄　放浪の旅にでる

秀吉との関係が悪化してきた信雄は、当時秀吉と対立していた徳川家康と手を結び、１５８４（天正 12）年に秀吉と戦をします（小牧・長久手の戦い）。戦いは、長期化し最終的には信雄と秀吉は講和を結びます。これは、信雄が秀吉に臣従する形で成立したものでした。

１５９０（天正 18）年に秀吉の命令で信雄は、関東を治めていた北条氏攻めに参加します。北条氏降伏後、秀吉は、信雄に領地を愛知西部・三重から愛知東部・山梨・長野への領地替えを命令しますが、信雄はこれを拒否します。これに腹を立てた秀吉は、信雄から領土を没収し、信雄は秀吉から逃げるように全国を転々とします。

秀吉は、１５９２（文禄元）年に信雄を許し、大名として復帰させます。

秀吉が１５９８（慶長３）年に死去し、豊臣政権に揺らぎがではじめます。天下統一の奪取を狙っていた徳川家康と秀吉の家臣石田三成が１６００（慶長５）年に関ヶ原で戦をします（関ヶ原の戦い）。この戦いにより家康が勝利し、天下人となります。この戦いで信雄は、息子の秀雄が石田方で戦に参加したため、領地を再び没収され大阪に住みました。

信雄は、家康と豊臣秀吉の子、秀頼が戦をすると、家康方につきます（大坂冬の陣）。これも家康の勝利となり、信雄は再び大名として復帰を許されます。このとき与えられた藩が宇陀松山藩（大宇陀）と小幡藩（現在の群馬県甘楽郡甘楽町（かんらぐんかんらまち））です。どちらにも行かず、余生を京都市内で過ごし、１６３０（寛永 30）年に死去。お墓は室生寺などにあります。

信雄は、二度も領地を失いながらもその都度復帰し、後世に織田家の血筋を守った人物といえるのではないでしょうか。